

## 第3回 香川県栗林公園掬月亭保存修理耐震改修検討委員会

### 議事概要

#### 1 日時

令和7年12月23日(火) 16:30~17:40

#### 2 場所

栗林公園商工奨励館北館

#### 3 出席者

(委員)

清水真一委員長、宮本慎宏副委員長、山田由香里委員(リモート)

※井原縁委員は欠席

(事務局)

栗林公園観光事務所長 他10名

(設計受託者)

有限会社伊藤平左エ門建築事務所他1社 4名

#### 4 議事概要

耐震改修案について

(議事について事務局から「資料3 耐震改修案について」により説明し、前回の委員会において意匠面で高く評価いただいた案(鉄骨柱)を基本とする耐震改修案を提示。)

委員

構造用合板を入れるところは新設柱105角を入れるとあるが、既存部とはどう接合するのか。

設計受託者

基本的には上と下だけでよいと考えている。下に関しては(新設柱と既存柱の位置が)ずれてきたので、新設の基礎の上に補強要素が置けるようになった。後は梁のところで梁同士の接合を行うことで、せん断力が伝達できればと思っている。

委員

中からは見えない。天井と床を少し欠き込む、となるのか。

設計受託者

そうである。

委員

掬月の三の間に押入と書いてあるが、どちらから使うのか。

設計受託者

茶室前畳廊下側に片開きの襖がついており、そちらから使う。半間分は外部から、茶室の雨戸などを入れる物入れになっている。三の間から見ると壁になっている。

委員

初筵観北棟の畳廊下の戸袋は、雨戸を横から手を入れて引き出せるのか。または、手を入れる小窓のようなものが付いているのか。

設計受託者

横から使うようになっている。小窓は付いていない。

委員

畳廊下の青色の壁（北面の壁）にも戸袋があるが、その壁はどうか。

設計受託者

北縁側から片開きの扉を開けて雨戸を出し入れするので、全面補強壁になる。

委員

初筵観 二の間 ○17 通りの補強壁はよく見えるが、仕上げはどう考えているのか。

設計受託者

両面に和紙を貼るが、長押があるので、その分を空けて柱を設置することになる。壁が天井まであり、大きく感じるため、違和感がないように長押を付けるかどうかを検討している。

委員

図では、補強壁が白い壁として目立つ感じに描かれているが、周りに馴染むように考えてほしい。

委員

提示された耐震改修案は良い案だと思う。天井面と畳面はどうするのか。

設計受託者

柱と壁は天井を貫通するので、別の材で廻縁を付ける。既存の廻縁を切らざるを得ない場合は、既存材を天井裏に保管し、別の材を取り付けるという方針で考えている。部屋そのものの廻縁は取りついたまま、温存できるようにする。

委員

畳も欠き込まれるのか。

設計受託者

畳を切り欠いてやるか、少し板を入れるかになると思う。既存の柱と新しい壁との間が 20cm ぐらいまでは近づけることができる。畳の切欠く部分で 20cm ぐらいになる。

委員

実際はその打合せを丁寧に行う必要があると思う。

委員

壁をふかすというイメージは持っていたが、20cm というイメージはなかったので、もうすこし少なくできないか。

委員

20cm というのは通り芯で、20cm ずれるのか、内法で 20cm なのか。

設計受託者

場所によって違う。大きな梁があって近づけない、礎石があって近づけないなど、場所によって状況が変わる。ただ、既存の長押等は温存できた方がよいと考えている。

委員

ぴったりとしているところもあるのか。小屋梁の方を削ってということはできるのか。

委員

小屋梁に抱きつける、巻き付けることはできるのか。

設計受託者

巻き付けるだけでは弱く、しっかり打たないといけないので難しい。

委員

なるべく寄せられるだけ寄せるように。

床下補強で新規土台といっているのはどういう納まりになるのか。柱と柱の間に入れるのか。

設計受託者

既存を切ったりはせず、柱と柱の間に入れる。

委員

他の土台はどう入れるのか。

設計受託者

受けがないので、地覆土台のようなかたちで壁を受けるようになる。

## 委員

土台というと柱を受けるのかと思ったが、壁受けということで理解した。

掬月の鉄骨柱の基礎が大きくなっているが、その意味がまだ十分に理解できていない。

## 設計受託者

内部に基礎を設けるところは、既存の建物の重量と繋ぐことで浮き上がりを抑えることができる。ここは、建物の外部にあることから建物の既存部分の重さに頼れないので、基礎自身の重さだけで浮き上がりを抑えるため、大きな基礎となる。もう一つ問題になるのが、他のところは応答変形を 1/30 以下に抑えているが、掬月の先端部分だけは 1/20 の変形になっている。鉄骨の溶接部分は一般的に 1/30 以下に抑えることになるが、鉄骨梁を基礎に埋め込むことによって大きな応力を受ける箇所溶接部分が来ない納まりになっているので、1/20 も許容できると考えている。

## 委員

屋根裏はどうなっているのか。

## 設計受託者

上屋と鉄骨柱を繋ぐため、垂木と垂木の間に鉄板またはアングルを垂木に添わせて設置する。

掬月三の間、押入のところは古図を見ると「床(御臺子)」と書いてあるが、現在は落掛等はないので原型復旧は検討せず、現状のままとする。

## 委員

斜め木摺の壁は将来的にはやり直しが可能と考えてよいか。

## 設計受託者

今回の補強は取り外し可能という前提で考えている。床下内の基礎の深さ 30cm として、掘削を少なくして、できるだけ地盤を傷めないように考えている。外部の基礎は重量が必要なため、深さ 40cm としている。内部を掘ると人力となり、経費のことを考えても難しいと思うが、外部は雨落ちにかかり、また、遺構が出てくる可能性があるため、基礎はできるだけ小さくして、内部に分散して設けることにする。

## 委員長

各委員からご意見を賜り、熱心な議論となった。本委員会では意匠性と耐震性の両立が非常に難しい課題について、委員それぞれの知見により意見させていただき、事務局や設計事業者において、様々な検討を実施していただいた。今回、事務局から提案のあった耐震改修案については、意匠性と耐震性の両立に取り組まれたものとして、一定程度、評価できるものとする。今後、事務局では、工事に向けてさらに準備を進めていくことになると思うが、可能な限り今回の耐震改修案を考慮したものが実現できるよう努めていただきたい、ということの本委員会の意見とする。

## 事務局

本日提示させていただいた耐震改修案に沿った形で実施設計を進めていく。